研究ノート

梁田蛻巌赤石詠古詩小箋

中村 健史
NAKAMURA Takeshi
神戸学院大学人文学部

要旨　梁田蛻巌「赤石詠古」詩を注釈し、成立の事情等を解説する。

キーワード　梁田蛻巌、明石、菅原道真、源氏物語、平家物語

1

梁田蛻巌に「赤石詠古」と題する詩がある（『蛻巌集』巻六所収）。その注釈を試みたい。

同作の成立については『蛻巌集』巻四に収められた「藤平輔に与ふ」という書翰が参考になろう。それによれば蛻巌は享保七年秋（一七二二年）をあまり距たらぬころ、竜野藩儒藤江熊陽の詩名を知り交際を求めようとした。たまたま熊陽に「赤石詠古」があることから、おそらくは次韻して贈ったのがこの詩である。

話の都合上、まずは「藤平輔に与ふ」の内容を紹介しておく。藤江熊陽、名は忠廉。字を平介（平輔）といい、直蔵と通称した。播磨国赤穂の人。天和三年生まれ。伊藤仁斎、東涯父子に学び、のち竜野藩に仕えた。宝暦元年（一七五二年）歿。著作に『赤穂郡志』など。

「藤平輔に与ふ」の本文は以下の通りである。

独り楽し少と与に楽するは楽しまざるに非ざるなり。必ずや人有り衆有りて然る後発揚舒鬯す。楽の情たるや、詩は固り古の楽歌の遺音なれば則ち其の情豈に以て異なること有らんや。

日に美東都に在り。幸ひにして学士大夫の擯する所と為らず。花樹の会、竹林の遊には輒ち下座に陪して薄技を献ずることを獲。彼倡へ此和して宮商迭ひに奏す。楽しみと謂はざるべけんや。己亥の夏赤石に入り叨りに郷校を司る。邑の人士皆な能く鉄槍を撚り赤兔を馭し翩々として自ら喜ぶ。而して競病の才与に共に芸圃に翺翔すべき者寥

乎として聞くこと無し。僅に頭目泉幸一、武学江修敬、釈日昇等数輩有り。差〻人意を強うするなり。泉南の大姓唐金興隆詩名有り。嘗て書問を通ずる者数たび。海に帆して一たび来る。此を除きて外絶えて言ふべき無し。風雨の夕べごとに鴞啼き猿哀しみ灯檠耿々として寐ぬること能はず。是を以て悒鬱日を弥る。

中井生の赤穂より至るに会す。従容として美に語りて曰く、吾子竜野に藤江某有るを知れりやと。因りて嚢中足下の伊藤才蔵氏に答ふる詩一紙を出だす。首を聚めて之を誦し、未だ篇を終へざるに已に其の凡匹に非ざるを知るなり。忻然として敢へて其の韻を瀆して以て名を左右に聞こえんことを図る。退きて竊かに謂ふに、斯の人や嘗て仁斎先生に従ひて古道を佩服す。詩は特だ其の緒余なるのみ。之を待るに雕繢を以てして可ならんかと。乃ち止む。

壬寅の秋、浪華の熊井生貴藩に之き帰るに弊廬に過る。盛作一首を携へ、且つ足下の人と為り豈弟にして厓岸無きことを道ひて再三置かず。是に於いて益〻信ず、足下の詩と人と温柔敦厚の意に称ひ藹然として其の表に溢るるを。乃ち又た竊かに謂ふに、竜野の茲の土と河山咫尺にして声気相接はると。蒹葭白露の嘆き有りと雖も復た溯洄阻長の憂へ無し。烏んぞ異日宮商倡和の楽しみの斯の人に在らざるを知らんや。断然として巴謳を呈するを恥ぢざるは寔に此れが為なり。爾之に継ぎて再和を辱賜せよ。又た熊井に因りて石詠古四首を観んことを得たり。同韻畳出して愈〻工みにして愈〻窮らず。夫の甕を撃ち缶を叩き韶武を以て自ら命ずる者の比に匪ざるなり。美雅り詩を善くせず。亦た唯だ之を嗜むこと深く之を学ぶこと久しきのみ。社中新旧と無く皆な兄弟なり。一旦離索千里悵焉として友を求むるの声を為さざることを得ず。而して天又た類を隣邑に錫ひ足下をして遐け棄てざらしむるなり。何の幸ひか之に如かん。抑も此れ翅に詩道の為のみならずして麗沢の習ひ、相観の善きを言ふ。蓋し詩よりも貴き者有り。君子の席に侍り君子の言を聞く。一たび其の徳に薫ぜんことを是れ希む。

（獨樂與少樂非不樂也。必有人有衆然後發揚舒鬯焉。樂之情也、詩固古樂歌之遺音則其情豈有以異哉。日美在東都。幸不爲學士大夫所擯。花樹之會、竹林之遊輒獲陪下座獻薄技。彼倡此和宮商迭奏。可不謂樂耶。己亥夏入赤石叨司鄉校。邑人士皆能撚鐵槍馭赤兔。翩翩自喜。而競病之才可與共翺翔藝圃者寥乎無聞矣。僅有頭目泉幸一、武學江修敬、釋日昇等數輩。差強人意也。泉南大姓唐金興隆有詩名。嘗通書問者數。帆海一來。除此外絶無可言。毎風雨之夕鴞啼猿哀燈檠耿耿不能寐。以是悒鬱彌日。會中井生自赤穂至。從容語美曰、吾子知龍野有藤江某耶。因囊中出足下答伊藤才藏氏詩一紙。聚首誦之、未終篇已知其非凡匹也。忻然圖敢瀆其韻以聞名於左右。退而竊謂、斯人也嘗從仁齋先生佩服古道。詩特其緒餘耳待之以雕繢可乎。乃止。壬寅秋、浪華熊井生之貴藩歸過弊廬。携盛作一首、且道足下爲人豈弟無厓岸再三不置。於是益信足下詩與人稱溫柔敦厚之意、藹然溢乎其表也。乃又竊謂、龍野之與茲土河山咫尺聲氣相接。雖有蒹葭白露之嘆無復溯洄阻長之憂。烏知異日宮商倡和之樂不在斯人乎。斷然不恥呈巴謳者寔爲此。爾繼之辱賜再和。又得因熊井觀赤石詠古四首。同韻疊出愈工而愈不窮。匪夫擊甕叩缶以韶武自命者比也。美雅不善詩。亦唯嗜之深學之久。社中無新舊皆兄弟也。一旦離索千里悵焉不得不爲求友之聲矣。而天又錫類隣邑使足下不遐棄也。何幸如之。抑此不翅爲詩道而言麗澤之習、相觀之善。蓋有貴於詩者矣。侍君子之席聞君子之言。一薫其德是希。）

大意は以下のとおり。一人で音楽を楽しんだり、少数の者と音楽を楽しんだりするのも楽しみには違いないが、他者と、あるいは多くの人々と楽しんでこそ気が晴れるというもの。古代の詩は音楽（歌）の一部だったのだから、やはり同じくだれかと楽しむのがよい。

わたしはかつて江戸に住み、幸いにして士人の仲間に入ることができたので、花木を愛で、竹林に遊ぶような機会にはかならず末座に加わって詩を献じたのだった。たがいに唱和してみごと音律にかなった作品が生まれるのも、やはり楽しみというべきであろう。享保四年（一七一九年）の夏、明石藩儒となったが、この土地の人々は槍をあやつったり、馬に乗ったりして喜ぶばかりで、文壇に驥足を伸ばすような才能の持ち主といえばじつに寥々たるありさま。わずかに組頭泉幸一、武芸師範江修敬、僧日昇などがいて、やや意を強くする程度だ。和泉の豪家唐金梅所は詩によって名高く、かつてたびたび文通を試み、一度などは海を渡って訪ねてきてくれたが、そのほか交流は絶えてない。このため憂鬱は日々去りやらぬ。風雨はげしく、梟や猿の鳴き声が聞こえてくるような夕暮れには、耿々たる灯火のもと眠ることもできずにいる。

赤穂からやってきた中井氏に面会したところ、従容として「先生は竜野に藤江熊陽という人がいるのをご存じですか」と問い、貴殿が伊藤蘭嵎（仁斎の四男）に贈った詩を袋から取りだした。二人で頭を寄せて読みはじめたが、最後まで行きつく前に非凡の作であることをさとり、喜んで和韻の作をお届けしようと思ったのである。けれども後になってひとり考えてみると、貴殿は伊藤仁斎先生に学んで古道に服し、詩は余力の及ぶところに過ぎない。文事によって交わりを結ぶのは本意ではなかろう。そこで手紙を送るのはよしてしまった。

享保七年（一七二二年）の秋、浪華の熊井氏が竜野藩に赴き、帰途わが家に立ちよった際、尊詩一首をたずさえ来たり、人となりの温和で謙虚なことを再三語ってくれた。かくてわたしは、貴殿の作品と人格がともに温柔敦厚の意を体し、やわらかく表にあらわれていることをいっそう信じるにいたったのである。さらに考えてみると、竜野と当地は距離が近く、同気相求め、思う相手にすぐさま会えぬという嘆きこそあるが、道が険しくてたどりつけないなどと心配する必要はない。いつか音律にかなった詩の唱和を行うという楽しみがあろう。あつかましく拙詠を呈上するのは以上の理由による。ぜひとも再和の作を賜りたい。また熊井氏によって貴殿の「赤石詠古」四首を読むことができた。同韻の字をくりかえし使って、決して行きづまることなく巧みに詠みなしており、郷土のよさを忘れ華美を追うような連中とは比べものにならぬ。

わたしは元来、詩が上手くない。深く好み、久しく学んでいるだけのことだ。社中をかまえてはいるものの、古参も新参もなく兄弟みたいなもので、師として指導しているわけではない。けれども遠国にひとりいれば、心は愁えに満ち、自然と友を求める気持ちがおこってくる。折しも天は隣藩に貴殿を住まわせてくださった。これ以上の幸福はないだろう。詩のうえで益あるのみならず、交際によって学問をはげまし、たがいに切磋琢磨することは大いに価値があるに違いない。君子のかたわらに侍り、君子の言葉を聞き、君子の徳に身をひたすことがわたしの願いである。

以下、簡単に注を附しておくと、「独り楽し少と楽するは」云々は『孟子』梁恵王下篇に「曰く、独り楽して楽しむと人と楽して樂しむと孰れか楽しきと。曰く、人と与にするに若かずと。曰く、少と与に楽して楽しむと衆と与に楽して楽しむと孰れか楽しきと。曰く、衆と与にするに若かざるなりと（曰、獨樂樂與人樂樂孰樂。曰、不若與人。曰、與少樂樂與衆樂樂孰樂。曰、不若與衆）」とあるのを踏まえる。「発揚」は心が高まるの

意。元来はものごとが外にあらわれることをいう。「徳発揚し、万物に詡（あまね）し（徳發揚、詡萬物）」（『礼記』礼器篇）。「舒鬯」はのびること。「詩は固り古の楽歌の遺音なれば」云々は『毛詩』大序、『礼記』楽記篇などの記述を意識する。

「日に」は『春秋左氏伝』杜注に「日、往日なり（日、往日なり）」という訓詁が見える。「薄技」は蛻巖がみずからの詩を謙称したもの。「宮」「商」は五音の一。転じて音階を指す。「叨りに郷校を司る」は藩校の教授となったの意か。男梁田邦鼐の撰した「顕考赤石教授蛻巖府君行述」には「旦夕邑の人士に教授す（旦夕教授邑人士）」とある（『蛻巖集』附録）。「赤兔」は関羽の愛馬。ここでは単に良馬を指す。「競病の才」は詩才。梁の曹景宗が競、病の二字を得てたちどころに詩を詠んだ故事に拠る。「時に韻已に尽き唯だ競病二字のみを余す。景宗便ち筆を操り斯須にして成る（曹時韻已盡唯餘競病二字。景宗便操筆斯須而成）」（『南史』曹景宗伝）。「頭目泉幸一」については『蛻巖集』巻三に和韻詩が、巻四に「泉幸一を輓す」が収められている。詩をよくしたらしい。「頭目」はかりに組頭と訳してみた。蛻巖は後年、みずからの地位を「頭目行人と級を同じくす（與頭目行人同級）」（「桂貞輔に与ふ」、『蛻巖集』後編巻七所収）と述べている。「武学江修敬」は入江東阿。山鹿高基（山鹿素行の次男）に師事した兵法家。伊藤東涯、服部南郭に学んで詩文にも心得があった。『蛻巖集』巻五に「江修敬を送る序」がある。「釈日昇」は不詳。法名からして日蓮宗の僧侶か。蛻巖の「席上十二仙歌」に「醍醐の法味日昇公（醍醐法味日昇公）」とうたわれている（『蛻巖集』巻一所収）。唐金興隆（一六七五～一七三九年）は号梅所。延宝三年生まれ。和泉の商人で廻船問屋、米問屋として産をなした。詩人として知られ祇園南海とも交流があったという。著述に『梅所詩稿』など。

「中井生」は不詳。「美」は蛻巖の名（邦美）。「其の韻を瀆して」は和韻または次韻して詩をつくること。「緒余」は『荘子』譲王篇に「道の真は以て身を治め、其の緒余は以て国家を為（をさ）め、其の土苴は以て天下を治む（道之眞以治身、其緒餘以為國家、其土苴以治天下）」と見える語だが、むしろこのくだりは『論語』学而篇「行ひて余力有らば則ち以て文を学べ（行有餘力則以學文）」に基づくのではないか。「雕繢」は彫刻と刺繍。転じてきらびやかな文飾。『南史』顔延之伝に、鮑照が顔の詩を「君の詩は錦を鋪（し）き繡を列（つら）ぬるが若く、亦た雕繢眼に満つ（君詩若鋪錦列繡、亦雕繢滿眼）」と評した逸話が見える。

「熊井生」は不詳。『蛻巖集』巻二に「熊井生の秋日母の山荘に侍するに和す」二首がある。「温柔敦厚の意に称（かな）ひ」は『礼記』経解篇に「温柔敦厚は詩の教へなり（温柔敦厚詩教也）」、『毛詩』を深く学べば温柔敦厚の人柄となる、とあるのが典拠。「声気相接（まじ）はる」は『周易』の「同声相応じ、同気相求む（同聲相應、同氣相求）」（文言伝・乾卦）を踏まえる。「蒹葭白露の嘆き」「溯洄阻長の憂へ」は『毛詩』秦風「蒹葭」に基づく措辞。「蒹葭蒼々として、白露霜と為る。所謂伊（こ）の人、水の一方に在り。溯洄して之に従はんとすれば、道阻にして且つ長し。溯游して之に従へば、宛として水の中央に在り（蒹葭蒼蒼、白露爲霜。所謂伊人、在水一方。溯洄從之、道阻且長。溯游從之、宛在水中央）」。前者は思う相手に会えない嘆きを、後者は道のりが険阻で遠いことをあらわす。「夫の甕を撃ち缶を叩き」云々は『史記』李斯伝所引「逐客を諫する書」に「夫れ甕を撃ち缶を叩き箏を弾き髀を搏ち、而して歌呼嗚々として耳目を快くするは真に秦の声なり。鄭、衛、桑間、昭、虞、武、象は異国の楽なり（夫擊甕叩缶彈箏搏髀、而歌呼嗚嗚快耳目者眞秦之聲也。鄭、衛、桑閒、昭、虞、武、象者異國之樂也）」、秦人は元来、甕や缶をたたいて琴を弾じ腿を打ちながら

歌うのをよしとし、鄭、衛、桑間、昭、虞、武、象といった音楽は異国のものである、と見えた。蛻巌はここで「熊陽の「赤石詠古」詩は、郷土の風俗を忘れ、華美を追う連中の作品とは比較にならない」と言おうとしたのである。

「離索」は仲間から離れて独居すること。『礼記』檀弓上篇に「吾群を離れて索居すること亦た已に久し（吾離羣而索居亦已久矣）」とある。「麗沢の習ひ」は『周易』兌卦に「象に曰く、麗沢は兌なり。君子朋友を以て講習すと（象曰、麗澤兌。君子以朋友講習）」（象伝）とある語で、朋友が助けあって学問につとめることをいう。「相観の善き」は『礼記』学記篇に「相観て善くするは之れ摩と謂ふ（相觀而善之謂摩）」、学ぶものがたがいに注意しあって善導するのを摩という、とあった。

次節に『蛻巌集』巻三所収、「藤平輔の赤石詠古の作に和す」四首の注釈を掲げる。

2

其一

海驛梅開倚石屏　海駅梅開きて石屏に倚(よ)り、
行人仍想淚衫青　行人仍(な)ほ想ふ涙衫の青きを。
紫陽消息花千里　紫陽の消息花は千里、
赤浦風煙春一庭　赤浦の風煙春は一庭。
已使貞松分雅詠　已に貞松をして雅詠を分たしむ、
肯同幽蕙入騒經　肯へて幽蕙と同じく騒経に入らんや。
關山玉笛空寥落　関山の玉笛空しく寥落、
日暮天寒長短亭　日暮れて天寒し長短亭。

菅公祠

［題意］「菅公祠」は明石市大蔵天神町にある休天神(やすみてんじん)（明石天満宮）のこと。菅原道真が太宰府に赴く途次、明石の駅に足をとどめ、駅長に「駅長驚く無かれ時の変改、一栄一落是れ春秋（驛長無驚時變改、一榮一落是春秋）」という詩を与えたことが『大鏡』時平伝に見える。のち駅長は道真の遺徳をしたって小祠を建て、これが休天神のもとになったという。くわしくは拙稿「播磨国明石菅神廟記注釈」（「人文学部紀要」四一、二〇二一年三月）を参照のこと。

［大意］崖に寄りかかるかのような海際の駅家には梅が咲き、過ぎゆく旅人は今なお涙に濡れた青色の単衣を思いだす。千里離れた都から筑紫に花の言づてが届く。明石では霞が風になびき、この境内にも春が訪れた。節操ある松はもう歌に詠まれたのだから、香草と違ってわざわざ「離騒」に入れる必要はなかろう。関の彼方に響く笛の音はただ荒涼として、夕暮れの寒々とした空のもと、遠近の宿場だけが見える。

［注釈］○海驛＝海辺の駅家。「驛」は律令制下、三十里ごとに置かれた施設。『播磨国風土記』の逸文に「明石驛家」と見え（『釈日本紀』巻八所引）、道真も立ちよったことが『菅家文草』から分かる。　○石屏＝屏風のように切りたった崖。「曲几香を焚いて石屏に対す（曲几焚香對石屏）」（儲嗣宗「小楼」、『三体詩』所収）。　○行人＝通りすぎる人、旅人。　○涙衫青＝「衫」は単衣。なかでも「青衫」は身分の低い官人の着るものであるが、ここは白居易「琵琶引」の「就中泣(なんだ)下ること誰か最も多き、江州の司馬青衫湿ふ（就中泣下誰最多、江州司馬青衫濕）」（『白氏文集』巻十二所収）に基づく表現。道真の身の上を江州司馬に左遷された白居易に重ねたのである。　○紫陽＝筑紫。道真の謫せられた太宰府を指す。　○

花千里＝道真が都を離れるとき、自邸の桜に向かって「桜花主を忘れぬものならば吹き来む風に言づてはせよ」（『後撰集』春上・五七）とうたいかけた故事を踏まえるか。　○赤浦＝明石。蛻巌愛用の表現。「年々赤浦中秋を賞す（年年赤浦賞中秋）」（「原曦墓に和す」、『蛻巌集』後編巻四所収）。　○春一庭＝「一庭春」に同じ。庭いっぱいに春が訪れたの意。「芳草一庭の春（芳草一庭春）」（宋之問「鑑上人房に題す」二首其一）。「庭」は「菅公祠」の境内を指すか。　○貞松分雅詠＝道真が「梅は飛び桜は枯るる世の中に何とて松のつれなかるらん」と詠んだところ、都の邸の松の木が太宰府に飛んできたという伝説に拠る（御伽草子『天神の本地』など）。「梅」「桜」もうたわれていることから「分」とした。この歌については徳江元正氏「絵巻作者の周辺――御伽草子「天神」の一考察――」（「武蔵野文学」三五、一九八八年一月）を参照のこと。「貞」は松の節操あるさまを言う。　○同幽蕙入騒經＝「蕙」は香り草。「騒經」は屈原の「離騒」（『楚辞』所収）。たとえば「既に余を替ふるに蕙纕を以てし、又た之に申ぬるに茝を攬るを以てす（既替余以蕙纕兮、又申之以攬茝）」、蕙を佩び、茝を採るがゆえに私は退けられた、とあるように、屈原の高潔を象徴するものとしてしばしば「離騒」に登場する。道真を屈原に見立て、貞松はすでに和歌に詠まれているから、幽蕙のごとく「離騒」にうたわれるのを待つ必要はないという。なお「離騒」を「経」と称するのは王逸の『楚辞章句』以来の伝統。　○關山玉笛＝「關山」は国境の関がある山。「關山月」という笛の曲があることから、辺塞詩では「胡笳」（塞外の胡人が吹く笛）の聞こえる場所として描かれる。「雪浄く胡天馬を牧して還れば、月は明らかなり羌笛戍楼の間。借問す梅花何れの処にか落つ、風吹きて一夜関山に満つ（雪淨胡天牧馬還、月明羌笛戍樓間。借問梅花何處落、風吹一夜滿關山）」（高適「塞上吹笛を聴く」、『唐詩選』巻七所収）。ここでは須磨関を指すのだろう。故郷を思ってやまぬ道真の心情をあらわす。「玉笛」は李白「春夜洛城にて笛を聞く」の例が著名（『唐詩選』巻七所収）。「誰が家の玉笛か暗に声を飛ばし、散じて春風に入り洛城に満つ（誰家玉笛暗飛聲、散入春風滿洛城）」。　○寥落＝荒れはてわびしいさま。「若為ぞ寥落の境、仍ほ酒の初めて醒むるに値ふ（若爲寥落境、仍値酒初醒）」（白居易「池上」、『三体詩』所収）。　○長短亭＝「亭」は宿場。前後の距離が短いものを「短亭」、長いものを「長亭」という。蘇軾「運判朱朝奉が蜀に入るを送る」に「夢に尋ぬ西南の路、黙して数ふ長短亭（夢尋西南路、默數長短亭）」。

其二

帝京花蕚此飄零　　帝京の花蕚此に飄零し、
瑣闥風光入夢青　　瑣闥の風光夢に入りて青し。
南浦寒煙憐夜月　　南浦の寒煙夜月を憐れみ、
北山芳草憶春庭　　北山の芳草春庭を憶ふ。
驪駒留別故人去　　驪駒別れを留めて故人去り、
綵鷁傳歌仙客經　　綵鷁歌を伝へて仙客経。
百丈崩濤天潑墨　　百丈の崩濤天墨を潑ぎ、
可堪雷雨撼茅亭　　堪ふるべけんや雷雨の茅亭を撼がすに。

須磨浦

［題意］『源氏物語』須磨巻を典拠とする。くわしくは［注釈］を参照のこと。

［大意］京の花はこの地に散りおちて、夢に見るのは宮中の春景色ばかり。南の海に寒々とただよう靄のなか月をながめ、かぐわしい草が茂る春の北

山を思う。黒馬は別れを告げ友人（頭中将）は去った。仙女（五節の君）は舟から歌を贈って通りすぎてゆく。百丈の大波が崩れおち、天が墨をそそいだかのように暗くなるとき、雷雨があばらやをゆるがすのをとどめることはできない。

［注釈］○帝京花蕚＝都の花。光源氏を指す。　○此＝須磨浦。　○瑣闥＝宮門。古く門の上にくさりのかたちを彫刻したところから出た言いかた。ここでは宮中を指す。　○青＝「瑣闥」が青く塗られていることをいう。「青瑣闥」に同じ。宮門、宮中の意。「暁漏追趨す青瑣闥（暁漏追趨青瑣闥）」（杜甫「献納使起居田舎人澄に贈る」）。　○南浦＝須磨浦。京の南にある。　○寒煙憐夜月＝光源氏は八月十五夜、須磨の配所にあって月をながめる。「月のいと華やかにさし出でたるに、「今宵は十五夜なりけり」と思し出でて殿上の御遊び恋しく、「所々眺め給ふらむかし」と思ひやり給ふにつけても月の顔の見まもられ給ふ。「二千里の外故人の心」と誦じ給へる、例の涙も留められず」（『源氏物語』須磨巻）。　○北山芳草＝「北山」は京のそれ、「芳草」は紫草。すなわち北山でめぐりあった紫の上のこと。　○憶春庭＝須磨巻に該当するような記述はないから、おそらく若紫巻の垣間見の場面を指すのではないか。「人なくてつれづれなれば、夕暮のいたう霞みたるに紛れてかの小柴垣のほどに立ち出で給ふ。人々は帰し給ひて惟光朝臣と覗き給へば、（中略）中に十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て、走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなるかたちなり」。「十ばかりやあらむ」という少女がのちの紫の上。流竄の光源氏は北山の春をなつかしく回想する。　○驪駒＝黒い馬。光源氏が宰相（かつての頭中将）にはなむけとして贈った「黒駒」のこと（次条参照）。また『漢書』儒林伝によれば、古く別れのときに「驪駒」の詩をうたう風習があったという。その辞にいう、「驪駒門に在り、僕夫具に存す。驪駒路に在り、僕夫整駕す（驪駒在門、僕夫具存。驪駒在路、僕夫整駕）」（『漢書』服虔注所引）。　○留別故人去＝「故人」は宰相。須磨巻では都からはるばる光源氏を訪ねてくる。その旅立ちのさまは「宰相、さらに立ち出でむ心地せで、「あかなくに雁の常世を立ち別れ花の都に道や惑はむ」。（中略）主人の君、かくかたじけなき御送りにとて黒駒奉り給ふ。「ゆゆしう思されぬべけれど、風に当たりては嘶（いば）えぬべければなむ」と申したまふ。世にありがたげなる御馬のさまなり」とつづられる（『源氏物語』須磨巻）。　○綵鷁＝「鷁」は想像上の水鳥。これを舳先に描いたり、彫刻したりしたところから、転じて船そのものを指す。「綵」は彩り、模様。「朱紱即ち当に彩鷁に随ふべし（朱紱即當隨彩鷁）」（杜甫「舎弟観の藍田に赴き妻子を取りて江陵に到り喜びて寄す」三首其一）。　○傳歌仙客經＝須磨巻に見える五節の君の挿話。かつて光源氏の情人であった五節の君は、大宰大弐となった父に連れられ、都にのぼる途中で須磨浦に立ちよる。直接の対面はかなわず、ただ船から「琴の音に弾きとめらるる綱手縄たゆたふ心君知るらめや」という歌だけを贈ってきた。「仙客」は五節の君を指す。恋しい人を仙女に例える漢文学の伝統に基づくものか。遍昭「天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ乙女の姿しばし留めめむ」（『古今集』雑上・八七二「五節の舞姫を見て詠める」）のように、五節の舞姫を天女として描く発想は和歌にもある。　○百丈崩濤＝崩れおちる高波。上巳の日、光源氏が祓えを行うと須磨の浦ははげしい嵐にみまわれた。「さる心もなきによろづ吹き散らし、またなき風なり。波いといかめしう立ちて、人びとの足を空なり。海の面は衾を張りたらむやうに光り満ちて、雷鳴りひらめく」（『源氏物語』須磨巻）。風雨は数日つづき、明石巻冒頭でもそのさまは「またの日の暁より風いみじう吹き、潮高う満ちて、波の音荒きこと巌も山も残るま

じき景色なり」と描写される。このうち「波いといかめしう立ちて」「潮高う満ちて」といった表現が「百丈崩濤」と対応しよう。　〇天潑墨＝空は墨を流したように暗いの意。「墨を潑して雲濃く帰鳥滅す（潑墨雲濃歸鳥滅）」（恵洪「江天暮雪」）。須磨巻の嵐の描写のなかに「空は墨をすりたるやうにて日も暮れにけり」とあるのに基づく。　〇雷雨撼茅亭＝嵐のさなか、光源氏の寓居に雷が落ち、火災が起こったことをいう。「いよいよ鳴りとどろきて、おはしますに続きたる廊に落ちかかりぬ。炎燃え上がりて廊は焼けぬ。心魂なくて、ある限り惑ふ」（『源氏物語』明石巻）。

其三

祲氛一抹紫微星　　祲氛一抹す紫微星、
海岸忍留舟翰青　　海岸舟翰の青きを留むるに忍びんや。
冠蓋春寒風度谷　　冠蓋春寒くして風谷に度（わた）り、
劍瓊雪暗夜過庭　　劍瓊雪暗くして夜庭を過ぐ。
鄧軍蜀嶺九天下　　鄧軍蜀嶺九天より下り、
宋主崖山幾月經　　宋主崖山幾月か経る。
赤幟光消空返照　　赤幟光消えて返照空しく、
無人對酒泣新亭　　人の酒に対して新亭に泣く無し。

鐵拐峯

［題意］「鐵拐峯」は須磨の鉄拐山。江戸時代には鵯越を鉄拐山中の地名とする説が有力で、『兵庫名所記』などの名所案内に見える。松尾芭蕉『笈の小文』にも「なほ昔の恋しきままに鉄拐が峰に登らんとする。（中略）羊腸險岨の岩根を這ひ登れば、すべり落ぬべきことあまたたびなりけるを、躑躅、根笹に取りつき、息をきらし汗をひたしてやうやく雲門に入るこそ、心もとなき導師の力なりけらし」とつづられる。

［大意］北極星に悪気がかかるので、これ以上海岸に舟を留めることはできぬ。鹵簿には春なお寒々しい谷風が吹きつけ、劍璽は雪の降る暗い夜、庭を過ぎていった。蜀の山を越えて成都を攻撃した鄧艾のように、義経は天から駆けくだる。崖山に籠もってほろびた宋の皇帝と同様、どれほどのあいだ安徳天皇はここにいたのだろう。平家の赤旗も輝きは失せ、空しく夕日だけが照らすが、いたずらに故郷をしのんで悲しむ者はいない。

［注釈］〇祲氛＝妖気。わざわいの予兆である。『楚辞』「九思」のうち「守志」に「天を障覆し祲氛あり（障覆天兮祲氛）」と見え、注に「祲は悪気の貌なり（祲惡氣貌）」という。　〇紫微星＝北極星。天帝の居所とされ、しばしば天子に例える。「清都、紫微、鈞天、広楽は帝の居る所なり（清都、紫微、鈞天、廣樂帝之所居）」（『列子』周穆王篇）。ここでは「北極星に悪気がかかり、天子の不祥を告げている」の意。　〇海岸＝一ノ谷の海岸。平家の軍船のあるところ。　〇舟翰青＝三字で「舟」をあらわす。「青翰」は鳥のかたちを刻し、青く塗った舟。顔延之「三月三日曲水詩序」に「竜文は轡を飾り、青翰は侍御す（龍文飾轡、青翰侍御）」とあり、その呂延済注に「青翰は船名なり（青翰船名）」とある（『文選』巻四十五所収）。　〇冠蓋＝冠と車のおおい。ここでは安徳天皇に扈従する平家の人々を指すのだろう。　〇春寒＝一ノ谷合戦は寿永三年二月七日（一一八四年）のこと。　〇劍瓊＝三種の神器の剣と璽。平家の奉じた安徳天皇を象徴する。　〇雪暗夜過庭＝平家が戦いに敗れ一ノ谷を去ったことを言うか。　〇鄧軍蜀嶺九天下＝魏の司馬昭が蜀を攻めたとき、鄧艾は間道から山を越えて兵をすすめ成都を急襲した。「艾陰平道より無人の地を行くこと七百余里。山を鑿ち道を通し、橋閣を造作す。（中略）艾氈を以て自ら裹み、推転して下る。将士皆な木に攀ぢ崖に縁り、魚貫して進む。先

登して江由に至る。蜀の守将馬邈降る（艾自陰平道行無人之地七百餘里。鑿山通道、造作橋閣。（中略）艾以氈自裹、推轉而下。將士皆攀木緣崖、魚貫而進。先登至江由、蜀守將馬邈降）」（『三国志』魏志・鄧艾伝）。義経の鵯越を鄧艾の行軍に例えた表現。　○宋主崖山＝南宋最後の皇帝祥興帝（趙昺）は元に追われ、崖山（現広東省）に砦を築いてよく抵抗したが、ついに敗れ、宰相陸秀夫とともに入水した。篭城は八箇月にわたったという。一句は安徳天皇を祥興帝に例えたもの。「宋主」の語は『宋史』永国公本紀に「衆又た衛王昺を立てて主と為す（衆又立衛王昺爲主）」とある。○赤幟＝平家の赤旗。「陸には赤旗立て並べてその数を知らず」（『源平盛衰記』巻三十六・一谷城構事）。　○返照＝夕日。「返照江に入りて石壁に翻る（返照入江翻石壁）」（杜甫「返照」、『唐詩選』巻五所収）。　○無人對酒泣新亭＝故郷をしのぶこと。「新亭」は東晋のころ、建康にあった亭。そこにあつまっていたずらに亡国の嘆きをなす人々を王導がたしなめたという故事が、『世説新語』言語篇に見える。「過江の諸人美日の至れる毎に、輒ち相邀へて新亭に出で、卉を藉きて飲宴す。周侯中坐にして嘆じて曰く、風景は殊ならざるに正に自ら山河の異なる有りと。皆な相視て涙を流す。唯だ王丞相のみ愀然として色を変じて曰く、当に共に力を王室に戮せ、神州を克復すべし。何ぞ楚囚と作つて相対するに至らんやと（過江諸人毎至美日、輒相邀出新亭、藉卉飲宴。周侯中坐而嘆曰、風景不殊正自有山河之異。皆相視流涙。唯王丞相愀然變色曰、當共戮力王室、克復神州。何至作楚囚相對邪）」。平家がなお屈することなく、再起を期したことをいう。

其四

蘭洲香霧鬱金屏　　蘭洲の香霧金屏に鬱し、
驚見天光鏡裏青　　驚き見る天光の鏡裏に青きを。
帝子暮過岡樹影　　帝子暮れに過ぐ岡樹の影、
龍王夜哭水宮庭　　竜王夜に哭く水宮の庭。
夙知豔態分三品　　夙に知る豔態の三品を分つを、
不論仙才通五經　　論ぜず仙才の五経に通ずるを。
當日朦朧春殿色　　当日朦朧たり春殿の色、
何如明月照琴亭　　明月琴亭を照らすに何如。

赤石浦

［題意］『源氏物語』明石巻を典拠とする。くわしくは［注釈］を参照のこと。

［大意］蘭の生えた中洲のかぐわしい霧が金屏風にたちこめ、日の光が鏡にうつるのに驚く。皇子は夕暮れに岡辺の館の木陰を通りすぎ、海中の先帝は夜ごと竜宮で涙にくれる。女に三つの品があることをとうに承知していた光源氏は、言うまでもなく五経に通じた才幹の持ち主。春の宮中で朧月夜と逢ったときの様子はおぼろに霞んでいるが、明月のもと、浜の館で琴を弾く場面のほうがずっとすばらしい。

［注釈］○蘭洲香霧鬱金屏＝蘭のはえた洲の香りが霧となってたちこめる。「金屏」は金の屏風。「金屏笑つて坐す花の如き人（金屏笑作如花人）」（李白「梁王棲霞山孟氏桃園中に登る」、『古文真宝』前集・巻七所収）。「鬱」はこもる。光源氏は須磨から明石に移り、浜の館に住まいした。一句は「その噂が明石の君のもとにまでとどいた」の意か。ここでは「蘭」は光源氏、「洲」は浜の館、「香霧」は源氏の声名、「金屏」は明石の君の部屋

のさまと解しておく。　○天光鏡裏青＝「天光」は天子の血を引く光源氏を指し、「鏡」は明石の君の部屋にあるそれと考えたい。光源氏が明石の君のもとを訪れたことを婉曲にあらわした句であろう。「鏡裏青」は「青鏡裏」に同じ。「青鏡」はくもりなく照らす鏡。　○帝子暮過岡樹影＝「帝子」は光源氏。「岡」は明石の君が住む岡辺の館のこと。源氏は「十三日の月の華やかにさし出でたる」夜、明石の君を訪ね、契りを交わす。その住まいは『源氏物語』のなかで「造れるさま、木深く、いたきところまさりて、見どころある住ひなり。海のつらはいかめしうおもしろく、これは心細く住みたるさま、ここにゐて、思ひ残すことはあらじとすらむと思しやるに、ものあはれなり。三昧堂近くて、鐘の声、松風に響きあひて、もの悲しう、岩に生ひたる松の根ざしも、心ばへあるさまなり」（明石巻）と描かれ、「樹」は松を指すと思しい。　○龍王夜哭水宮庭＝「龍王」は桐壺帝。明石巻では、光源氏の夢に父帝があらわれ「我は位にありしとき、誤つことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふるほど暇なくて」、死後、罪をつぐなっていると告げ、また「海に入り、渚に上り」、海のなかから源氏を助けにきたと語る。これを踏まえれば、一句は「海中の王となった桐壺帝は竜宮にあって夜ごと罪に泣いている」と解することができよう。「水宮」は海底の宮殿。　○夙知豔態分三品＝「豔態」は女のさま。雨夜の品定めで上の品、中の品、下の品の女が論じられたことを踏まえる。『源氏物語』帚木巻に「その品々やいかに。いづれを三つの品に置きてか分くべき。元の品高く生まれながら、身は沈み、位短くて人げなき。またただ人の上達部などまでなり上り、我は顔にて家の内を飾り、人に劣らじと思へる。そのけぢめをばいかが分くべき」。「夙」とあるのは、これが源氏十七歳のときのできごとであるため。　○仙才通五経＝「仙才」はすぐれた才。光源氏のこと。「通五経」は経書に通ずるの意であるが、これはものの例えで「わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひつづけばことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける」（『源氏物語』桐壺巻）という源氏の才幹学識をあらわすのだろう。　○當日朦朧春殿色＝光源氏が須磨に退くきっかけとなった朧月夜との密会を指す。「朦朧」は朧月夜を示唆する表現。紫宸殿の桜花の宴が果ててのち、源氏は「月いと明うさし出でてをかしき」を見過ごしがたく、藤壺のあたりを歩くうちに、「いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、「朧月夜に似るものぞなき」とうち誦じて、こなたざまには来るものか。いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ」（『源氏物語』花宴巻）。「當日」はその日。この場合は過去の一日を指す。「春殿」は春の宮殿。朧月夜と出会った藤壺のあたり。　○何如＝この場合は「どちらがすぐれているか、風情があるか」と二つのものを比較し、「明月が琴亭を照らすのにかなうはずもない」と後者をたたえる表現。大典『詩家推敲』に、何如、如何はともに「ナンゾシカンノ義アリ」とする（巻上）。　○明月照琴亭＝光源氏が明月のもと、浜の館で琴を奏でる場面を指す。「のどやかなる夕月夜に、海の上曇りなく見えわたれるも、住み馴れたまひし故郷の池水、思ひまがへられ給ふに、言はむかたなく恋しきこと、いづかたとなく行方なき心地し給ひて、ただ目の前に見やらるるは淡路島なりけり。（中略）久しう手触れ給はぬ琴を、袋より取り出で給ひて、はかなくかき鳴らし給へる御さまを、見奉る人もやすからず、あはれに悲しう思ひあへり。広陵といふ手を、ある限り弾きすましたまへるに、かの岡辺の家も、松の響き波の音に合ひて、心ばせある若人は身にしみて思ふべかめり」（『源氏物語』明石巻）。「琴亭」は浜の館。琴の音が源氏と明石の君を結びつけるきっかけとなる。